

HHHH 大学 IIII 図書館

訪問滞欧者：IIII 図書館日本図書担当及び同大学アジア学部教授・日本研究者

訪問・報告者：安江明夫（資料保存研究者、学習院大学非常勤講師）

以下、調査結果と所見に分けて記します。

□調査結果

1 コレクションについて

概要：所蔵日本関係約 2 万 5 千冊。和書、洋書がその約半数ずつを占める。和書中に和古書が混在する。ほかに和古書、古文書等を含む甲コレクション、乙コレクションを有する。以下はその 2 コレクションの概略説明。

（甲）コレクション：甲企業社長からの遺贈資料約 100 点。同企業は明治時代に京都に染料商として開業した企業。昭和戦前期に当該国に出張所を設けている。同企業社長遺族からの個人的寄贈。資料はその 75%が目録化済み、NACSIS-CAT 入力済み。

（乙）コレクション：乙教授（農業経営・町村経営等の研究者）からの寄贈資料。2 箱のみ管見。明治期からの文書・記録等を含む。普通に言う貴重資料ではないが、歴史的価値を有する資料はありそう。寄贈を受けた（乙）コレクションは全部で 9 箱、なかに生きた虫が発見された箱があった。それは箱ごとプラスチック袋に密封。

和書のマイクロフィルムを所蔵。これは明治期刊行図書マイクロフィルムで国立国会図書館所蔵資料の複製。実見しなかったが、フィルム支持体はポリエステルフィルム、担体は銀塩であり、安定性が高い素材である。

2 書庫（保管場所）・環境

和書保管場所は屋根裏に設置した書庫。空調なく、夏は暑く、冬寒い環境。夏は湿度も高いとの話。但し、かび害は発生していない。なお、確定ではないが、近年中に別書庫に蔵書に移す計画がある。

書庫内に、施設管理部門により、温度・湿度測定のため数個のデータロガーが配備されている。その調査結果は図書館側（資料管理側）には届いていない。

3 資料の取り扱い・コンサベーション

天理大学企画・実施の「古典籍ワークショップ」は古書の目録作成だけでなく、資料の取り扱い、保管・保存の研修を実施している。同ワークショップに参加した同図書館日本図書担当が和古書等の取り扱い、コンサベーションに気を配り、取り組んでいる。

そうした成果の 1 つに和装本を白紙でラップして保管する手法の実施がある。

和書は帙あるいはそれに類した保存箱に収納するのが望ましいが、それまでの「暫定的処置」としてラップ方式を取り入れていると理解した。

ラップに使用の白紙は通常のコピー用紙だが、これは無酸（acid-free）でリグニン非含有（lignin-free）の紙*で保存用ラッパー紙として良好な品質の素材である。

*調査後、東京で安江が検査した。

保存ラッパーは、保存容器収納が望ましいが、保存容器（保存箱など）を作成する業者は無く、また仮に業者があってもそれに割くだけの予算確保が難しいとのこと。さらに紙資料のコンサーベーションを担当する職員が大学にはおらず、大学図書館が必要な場合には、外部の補修業者に依頼しているとの説明。

4 防災計画

図書館として(和書コレクションについても)資料の防災計画があるのは評価できる。

5 資料の利用

利用頻度：和古書に限定すると利用は少ないとの説明。内容的に見て、今後の利用の大幅拡大は難しいと理解した。

目録整備／OPAC：日本関係洋書はすべて目録化済み。和書は 9800 点（80%）が目録化済み。

□ 所見

1 書庫・保管・環境

空調設備のない屋根裏書庫の環境は、資料保管上、適切ではない。ただ、それとは別に同書庫の環境把握が重要である。折角、書庫内にデータロガー配備がなされているのだから、施設管理部門から調査データを入手し、現状理解に努めることが重要である。

書庫内で、虫・かび害が見られない点は喜ばしい。とは言え、虫・かび害のほか、埃・塵、資料の排架状況等について、スタッフが定期的に（例えば年に一度など）書庫内を巡回、点検することが望ましい。

2 コンサーベーション

将来の環境改善（より適した環境への蔵書移動など）を期待するが、一方、当面は特に小環境（micro-environment）整備に取り組むのが良いと考える。具体的には保存箱、保存封筒等への資料収納である。

現在装備の和装本のラッピングは良いが、塵・埃、照明等からの史資料保存策としてはきちんとした容器収納が勧められる。

この場合、中性ボード（acid-free board）を入手して自分達（学生アルバイトなど含め）で作製するか、あるいは外部業者に依頼することになる。中性ボードの入手先、保存箱の作り方、保存関連業者などの情報については、必要なら大学図書館保存担当部署に尋ねるのが良いと考える。そこで不明なら、和装本の補修・コンサーベーションに取り組んでいる近隣の大学和古書保存担当者の同僚・同業者に尋ねるのも一法である。

3 虫害対策

(乙) コレクション中に生きた虫が発見されている。日本でも寄贈、寄託資料を受け入れる際に良く見られる現象で、しっかりした対応が必要である。

まず肝要なことは—これは同図書館でなされているが—虫害図書を密封して（あるいは外部保管など別置して）図書館内・書庫内に虫害が広まらないようにすること。2番目に殺虫である。殺虫には、被害資料が多ければ、普通は燻蒸処理で対応する。もしそれが外部業者不在などで不可能な場合、また虫害が少量の場合は、別紙に紹介の選択肢がある。

4 蔵書構築と資料保存

蔵書構築(collection development)は収集と保存を基盤に成り立つと報告者は考えている。収集なくして蔵書構築はなく、一方、しっかり資料が保存されなくては「蔵書」とならないからである。

資料の収集・選書において優先順位が設けられるように、蔵書・資料の保存においても優先順位を考慮することが重要である。優先順位なしでは蔵書全体の長期保存に取り組むことが難しい。

蔵書・資料の優先順位は、価値(value)、利用頻度(usage)、モノの状態(condition)の3要素から判断するのが通常である。例えば、価値が高く、利用があり、資料の状態が悪い資料は、優先的に補修などを行う。あるいは複製してそれを利用に供する。一方、状態が悪くても、価値が低く、利用が殆どな資料は「そのまま、何もしない」で置く。

上記は、同大学図書館の和書の蔵書構築方針を検討する、あるいは既に方針が存するならそれを再検討することを要請する。そして和書蔵書構築方針に基づいて、また他方、「利用頻度」と「モノの状態」を勘案して保存処置の選択肢を検討する。保存処置の選択肢には「補修」「複製保存(デジタル化など)」「環境整備」「容器収納」等があり、かつ、「何もしない」「除籍(廃棄等)」も含まれる。

この場合の「価値」には学術的価値、文化的・歴史的価値、金銭的価値等が含まれる。価値判断は最初に同大学図書館の使命に即して、次には当該国家・国民の視点で、さらにはヨーロッパ全体を視野に行うことになる。

同大学として研究・教育の視点から必要としない主題・内容の和図書・和雑誌端本等については、慎重を期す必要はあるが、今後の取扱いを検討する必要があると考える。保存はコストであり、そのコスト負担は、一般的には、様々な価値の現出により正当化される。除籍(廃棄)も保存の選択肢の1つである。

5 協力

デジタル化含め資料保存には一定の資金が必要である。それが学内で調達できない場合には、学外からの資金調達(助成、寄付など)に務める必要がある。この点では独自に努力するほか、例えば近隣の大学和古書保存部門担当者と連携・協力することも考えられる。

(別紙)

虫害図書等の殺虫方法

一般的な燻蒸殺虫法とは別に、日本で実施・採用されている殺虫方法として、以下の3種を紹介する。

1) 低温殺虫法

資料を低温保管(冷凍)し、殺虫する方法。以下に実施例サイトを紹介します。

一橋大学社会科学古典資料センター：<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/preservation/index.htm>

なお、上記サイトは貴重資料の一般的な保存・取り扱いの良き手引きとなる。

一般家庭用冷凍庫(マイナス20℃～25℃)に本をプラスチック・バッグに密封して4週間程度冷凍保管すれば、同様の効果を得ることができる。

2) 低酸素濃度殺虫法

密封空間を低酸素・無酸素状態にして殺虫する方法。最近、下記の廉価な方法・材料が日本(資料保存器材㈱)で開発され普及し始めている。(商品名は「モルデナイベ」。今回の処置のために、試験的に安江が材料を無料送付できるので必要なら連絡下さい。)

資料保存器材：http://www.hozon.co.jp/archival/product_other_2.html

3) 炭酸ガス殺虫法

炭酸ガスにより殺虫する方法。以下に解説がある。

http://www.bunchuken.or.jp/wp-bunchuken/wp-content/uploads/2012/03/59_12.pdf

日本では以下の簡便な用具(日本液炭㈱製作)が活用されている。(ヨーロッパにも同種の器材が販売されていると考える。)

日本液炭：http://www.n-eco.co.jp/company/business/next/gas_remote09.html

上記は東京大学経済学部資料室、横浜開港資料館等で採用されている。

JJJJ University Library/ Japanese Books Section

Recipient : Library staff member in charge of the Special collection

Visitor conducted survey/report: Akio Yasue (Preservation consultant for libraries and archives)

□ Survey summary

1. Collection

Most of Japanese old books are the donation from the Japanese government after the WWI when the University Library was heavily damaged and lost totally its library collection. Donated books from Japan counted about 14,000 volumes.

The University Library was bombed by the German troops in the WWII and lost most of its collection. Some 4,000 volumes Japanese books survived after the WWII which are located today at UCL Library.

With the brief looking the collection, it seems that MW who selected the donation in 1920ies had chosen good and representative books of Edo/ Meiji period Japan and some books and documents still older. The collection is no doubt historically valuable and valuable from the contents point of view.

For the detail of the collection, see MY ed. “JJJJ University Library Japanese Books Catalogue” Bensei Shuppan, 2000, (『JJJJ 大学蔵日本書籍目録』Y M 編、勉誠出版、2000.)

Beside the library catalogue, books in the collection are included in “Union Catalogue of Early Japanese Books in Europe” of National Institute of Japanese Literature. Cataloguing of Japanese books to include the University Library’s OPAC is underway. It is done by a part-time Japanese cataloguer (half day per week).

2. Stacks and storage condition

Above mentioned Japanese books are conserved in the Library’s rare books storage. The storage is in a very good condition where keeps constant temperature and humidity 24 hours a day and all year around.

Japanese old books are mostly in very good condition. It would be because 1) the books were well repaired or provided protective enclosure (chitsu) when donated, 2) they are not used often and 3) they are kept in a good environment at present.

3. Conservation

Rare books section employs a conservator by contract who works for Japanese books as well. At the time of my visiting, she was in Tokyo to attend the International Course on Conservation of Japanese Paper organized by Tobunken. It is expected that she would gain more knowledge to work on the Japanese books after the training in Japan.

4. Preservation

Digitization of 50 Japanese books has been carried out in the framework of University Library’s digital library project. The work done so far is accessible through the internet since the

beginning of this year.

5. Disaster planning

The Library has a disaster plan for the collection. The plan has a special section for rare and old books which covers Japanese old book collection.

Consultant's comments

1. Collection

Most of the collection is a gift from the Japanese Government in 1920ies. However some were added after it of which are even in 1950ies and 1960ies. Korean (and probable Chinese) books are found among them.

These additions might signify the history of the collection. However what is historically valuable and thus considered as heritage are the Japanese books gifted in 1920ies. Therefore I think it would be advisable to distinguish additions from the original donation either physically or in the catalogue if it is not done so far.

This can be done fairly easily when doing their cataloguing.

2. Digitization

Digitization of Japanese Old books is a wonderful endeavor for both access to these digitalized books and for the recognition of the valuable collection. The endeavor should be known much more in the country as well as worldwide. Probably more than 50 titles would be expected to be digitalized when fund becomes available.

3. Conservation

Condition of Japanese books is quite good. It would be sufficient to check each book's condition when it is circulated, displayed, digitized or catalogued. When some minor repair or protective enclosure becomes necessary, Library's conservation staff would surely treat books properly.

4. Access and cataloguing

Preservation is for access. For the accessibility of collections, book titles should be included in the University's OPAC. Present cataloguing works for Japanese books seems rather slow to take quite long time to complete. If the Library's budget would not be available for speedy cataloguing works, it should be thought to obtain outside funding.

For example, next year (2016) marks 150 anniversary of the friendship between Japan and the country in question, and there will be many events to celebrate it. That would provide a good opportunity to show up the University Library's Japanese old books as they are one of important testimony of the friendship between the two countries. The occasion also would be a chance to obtain funding to care the collection such as cataloguing and digitization of Japanese old books.

In regard of the access to the Japanese books, a planned display of certain Japanese books next year in the occasion of the above mentioned 150 anniversary would be a very good opportunity to obtain the recognition of and interest to the heritage Japanese books.